

助動詞「ず」確認テスト（打消） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 「(人の) 心はさあ (どうだか) わからない (=知らない)。」。「知らず」 = 「知らない・わからない」で、紀貫之の有名な歌（『古今和歌集』）の一節です。「いさ」は「さあ (どうだか)」と打消を伴って用います。

問2 已然形。「見えねども」は「見え+ね+ども」で、接続助詞「ども」は已然形に接続するので、「ね」は打消「ず」の已然形です。「見えねども」 = 「(はっきりとは) 見えないけれど」。

問3 「秋来ぬ」の「ぬ」は完了（終止形）。直前の「来」は「来<き>」という連用形で、「来<き>+ぬ」だからです（「秋が来てしまった」）。一方「見えねども」の「ね」は打消（已然形）。直前の「見え」は下二段「見ゆ」の未然形「見え」で、「見え+ね」だからです（「見えないけれど」）。同じ歌の中でも、直前が連用形なら完了、未然形なら打消と決まります。

問4 連体形。「あはぬ」の下に断定の助動詞「なり」が続いており、断定の「なり」は連体形に接続するので、この「ぬ」は打消「ず」の連体形です。完了「ぬ」でないとと言えるのは、直前の「あは（ハ行四段の未然形）」が未然形だからです。もし完了なら直前は連用形「あひ」になるはずですが。

問5 「現実でも夢でも（あなたという）人に会わないのだなあ。」。「あはぬ」 = 「会わない」（あは<未然形>+ぬ<打消連体形>）、「なりけり」 = 「～なのだなあ」と詠嘆します。『伊勢物語』東下りの「宇津の山」の歌の一節です。

問6 連体形。「帰らぬ」がすぐ下の体言「人」を修飾している（「帰らない人」）ので、連体形です。連体形は本系列では「ぬ」の形になります。直前の「帰ら」が未然形なので、完了「ぬ」ではなく打消「ず」の連体形と分かります。

問7 「じ」の意味は、(1) 打消推量「～ないだろう」、(2) 打消意志「～まい・～ないつもりだ」の二つです。違いを一言で言うと、「ず」は事実をそのまま打ち消す（～ない）のに対し、「じ」は推量・意志を打ち消す（～ないだろう・～まい）という点です。

問8 「(神社のある) 山までは見ない (=見なかった)。」。「見ず」は「見（マ上一「見る」の未然形）+ず（終止形）」で、言い切りの打消です。仁和寺の法師が、ふもとの社だけを拜んで本当の目的地（山上の石清水八幡宮）までは見なかった、という場面です。

問9 連用形。「ざりけれ」は「ざり+けり（過去）の已然形『けれ』という組み立てです。過去の助動詞「けり」は連用形に接続するので、その上にある「ざり」は連用形です。すぐ下の「けれ」は、過去の助動詞「けり」の已然形（下の「ば」に続くため）です。

問10 「(仁和寺の法師は) 年をとるまで石清水（八幡宮）を参拝しなかったので。」。「拝ま（未然形）+ざり（ず+あり）+けれ（過去『けり』の已然形）+ば」という形で、「～しなかったので」と理由を表します。

問11 終止形。「もとの水にあらず。」とここで言い切って文が終わっているので終止形です。終止形も「ず」の形になります。

問12 連用形。「絶えず」の下に「して」(接続助詞)が続いて下に文がつながっていくので連用形です。「絶えずして」=「絶えることがなくて」。

問13 (1) 終止形。「おごれる人も久しからず、」とここで一度言い切り(中止し)、読点で句が切れています。(2)「勢いの盛んな者も長くは続かない。」。「久しから(形容詞「久し」の未然形〈カリ活用〉)+ず(終止形)」で「長く続かない」という打消です。『平家物語』冒頭の一節です。

問14 未然形。「ず」は必ず未然形に接続します。例:例文①「知ら+ず」(ラ行四段「知る」の未然形「知ら」)、例文④「あは+ぬ」(未然形「あは」)など。下に「ず・ぬ・ね」がつく形が未然形です。

問15 打消「ず」であるのは(ア)・(ウ)・(オ)。

(ア)「咲かぬ」=「咲か(未然形)+ぬ」で打消の連体形。

(ウ)「知らぬ」=「知ら(未然形)+ぬ」で打消の連体形。

(オ)「吹かね」=「吹か(未然形)+ね」で打消の已然形(〜ねば)。

一方、(イ)「散りぬ」は「散り(連用形)+ぬ」で完了の終止形、(エ)「起きね」は「起き(連用形)+ね」で完了の命令形「〜てしまえ」です。

問16 見分けの根拠は「直前の語が未然形なら打消『ず』、連用形なら完了『ぬ』」です。

・打消とした(ア)咲か・(ウ)知ら・(オ)吹かは、いずれも下に「ず」をつけられる形=未然形です。

・完了とした(イ)散り・(エ)起きは、「ます」をつけられる形=連用形です(散り+ます/起き+ます)。同じ「ぬ・ね」でも、直前が未然形か連用形かで意味が決まります。

問17 「咲かぬ(里)」=「咲かない(里)」。「散りぬ」=「散ってしまった」。前者は打消、後者は完了(「〜てしまった」)です。

問18 「行かね(ば)」=「行かないので・行かないと」。「行きね」=「行ってしまえ」。前者は打消「ず」の已然形+接続助詞「ば」、後者は完了「ぬ」の命令形です。

問19 ザリ系列は、打消「ず」(の連用形「ず」)に、ラ変動詞「あり」がついた「ずあり」が音の縮まり(音便)で「ざり」となり、一語のようになったものです(ず+あり→ざり)。もとになった二語は「ず」と「あり」。活用はラ変動詞「あり」と同じ(ラ行変格活用)になり、「ざら・ざり・○・ざる・ざれ・ざれ」と変化します。

問20 終止形=「ず」。連体形=「ぬ」。已然形=「ね」。(ザリ系列で言えば連体形「ざる」・已然形「ざれ」も使われます。)

問21 「直前の語が未然形なら打消『ず』の連体形『ぬ』、連用形なら完了『ぬ』の終止形」。(例:咲か〈未然〉+ぬ=打消/散り〈連用〉+ぬ=完了。)

問22 「〜ねば」の「ね」は、直前が未然形になっていて、打消「ず」の已然形に接続助詞「ば」がついた形なので「〜ないので・〜ないと」の意味になります。一方、完了「ぬ」の命令形「ね」は文を言い切って「〜てしまえ」と命令します。つまり、後ろに「ば」が続いて文がまだ続くなら打消已然形「ね」、「ね。」で言い切るなら完了命令形「ね」と見分けます。
